

湯澤規子 著

『ウンコはどこから来て、どこへ行くのか—人糞地理学とはじめ』

筑摩書房 2020年10月 249頁 840円+税

強烈な書名に驚かされるが、「便所」から「トイレ」の時代を生きた評者にとっても「ウンコ」は日常と関わる大問題であった。経済の高度成長下、「モダン」という名のもとに都市の居住様式で大きく変化したのは、便所、台所、風呂であったが、なかでも劇的に変化したのは「便所」であったように思う。

小学校時代、便所といえば掃除当番があったが、評者は掃除にはそれほど抵抗がなかったものの、作業には消毒(殺菌)薬品の「クレゾール」を使用した記憶があり、ウンコは「汚い」とともに「危ない」というイメージを子供ながらに持たざるを得なかった。

本書は、そのウンコについて真正面から取り上げ、概念の変遷の検討を試み、人文地理学の視点から「ウンコ」の本質にせまろうとする意欲作である。全体の構成は以下の通りである。

プロローグ

- 第1章 ウンコとは何か
- 第2章 世界がウンコに求めているもの
——一番身近なSDGs
- 第3章 宝物としてのウンコ
——近世日本の下肥
- 第4章 せめぎあうウンコ利用と処理
——近代における「物質循環」の再編
- 第5章 都市でウンコが「汚物」になる
——産業革命と大量排泄の時代
- 第6章 消失するウンコの価値
——地域固有の清掃行政と戦後下水道物語
- 第7章 落とし紙以前・トイレットペーパー以後
——お尻の拭き方と経済成長
- 第8章 ウンコが教えてくれたこと
——世界の分岐点についてのダイアローグ
エピローグ

第1章の「ウンコとは何か」では、ウンコはいつから誰によって「汚い」ものになったのか、清潔、不潔の価値観は何によってかを問い、その手

がかりを「便」「糞」などの漢字の意味から探し、第2章の「世界がウンコに求めているもの」として現代的な課題へと話題を展開する。衛生的なトイレを使用できない人が地球上には24億人もいることに評者は驚き、著者が幼い時に公園の「汲み取り式便所」に後ずさりをした話(38頁)では、逆バージョンの経験を思い出した。若い時、東京の親戚の公団住宅に泊まった評者は、狭い腰かけの洋式便所では、便意をもよおさず、とうとうバスに乗って最寄りの駅まで行き、駅の和式便所で済ませたという苦い思い出がある。

このようにウンコやトイレの受け止め方は、個人的経験の影響が大きいものの、それは歴史的な過程のなかで、さまざまな生活様式に表出したものであり、時代性、地域性、民族性、階層性などをもち、社会科学のメルクマールとなりえる。この章ではケニアの「フライング・トイレット」(41頁)が紹介されていたが、パリやロンドンがきれいな街になったのは、都市の歴史においては近年のことであり、19世紀以前の「花のパリ」の道は、投げ捨てられたウンコだらけであった。人間とウンコの関係を探るには、まず、人間はどのようにウンコを認識してきたのが問われることになる。

第3章「宝物としてのウンコ」では、古代、中世のウンコ観が「汚い」「ケガレ」というイメージがある反面、「黄金」や「神聖」などとも捉えられたなど多面性をもつという話から、近世には「宝物」に変化した時代性、さらに食事によるウンコの差異から生じる階層性などを論じている。そのなかで西洋人が人糞を肥料としてみない理由を著者は、西欧社会には人糞尿を肥料という「有価物」と、伝染病などを媒介する「汚物」という2つの相反する見方があり、どちらかという「汚物」としての位置付けが支配的であったとした(67頁)。その理由として、著者は、農業においては人糞尿ではなく、主に休閑地で放牧していた家畜の糞尿を肥料としており、人糞尿と家畜の糞尿を明確に分ける宗教的な捉え方の違いに起因するのでは、と推測している。

一方、近世日本においては、大都市である江戸、大坂、京都はもちろんのこと大藩の城下町の野菜需要は大きく、近郊農民が、農地の生産力を高めるチッソ肥料となる人糞尿を競って購入し、

狭い農地に投入したのはごく自然のことであった。この人糞尿の肥料のことを「下肥」、購入した肥料のことを「金肥」と呼び、城下町金沢周辺の農家の経営費における下肥購入費は支出の2割を占めていた。

今日、東京土産の練馬大根の沢庵や、千枚漬などの京漬物は、近世から近代にかけての大都市周辺の下肥購入圏を基盤とする巨大な野菜産地の残像とも言えよう。評者は、狭い国土に3,000万人が暮らした近世日本の農業に、今日の集約農業の原点を見る思いがする。

第4章「せめぎあうウンコ利用と処理」では、近代に入りウンコの利用が販売（購入）肥料の増加によって衰退したかどうかを、著者の長年のフィールドである尾西地方の織物業の調査で見出した「肥料渡帳」で検証している。その史料分析によると織物工場では、女工の大便、小便を区分して農家に販売し、その代金の支払いは、現金だけではなく、大根などの農作物や農民による織物関連作業の労働代金で差し引いていたことを明らかにした。このことから近代、尾西地方では、人糞尿を介して工場（都市）と農村関係が維持され、その均衡が図られていたと言える。

また、著者は、1910年代に販売（購入）肥料の消費が増加するものの、購入費増加のため農業生産性はそれほど上がらず農家の困窮を招いたのに対して、農業試験場や郡農会が低コストの人糞尿などの下肥利用を、科学的な根拠を呈示して奨励している点を重視する。さらに同時期に武蔵野の農村に住み、その変貌を捉えた徳富蘆花のエッセイ「みみずのたはこと」のなかで「吾 不浄を培ひ」という下肥利用の記述を見出し、「追々都会附属の菜園になりつつある」（95頁）という変貌する武蔵野の風景の基層には、膨大な人糞尿が使用されていたのではと推測している。

だが、「下肥技術の向上」と「下肥商品の消滅」という相反するベクトルが、大都市周辺の農村では回り始めており、著者はそれを「せめぎあうウンコ利用」と論じる。1920（大正9）年には人口が200万人を超えていた東京では、人糞尿の処理への模索が続くなか、近郊農村に暮らす農民の下肥をめぐる心の葛藤を描いた農民運動家 渋谷定輔の詩「沈黙の憤怒」によって、都市、農村の均衡の関係性が失われつつあったことを浮き彫りに

する。

第5章「都市でウンコが「汚物」になる」では、急速な人口増加を続ける大都市では尿尿が滞留し、農村への供給が難しくなり、ウンコが処理すべき「汚物」になっていくありさまを論じる。尿尿処理は伝統的な慣行が崩れるなか、コレラやペストの大流行もあり、広く社会問題化し、1900（明治33）年には「汚物掃除法」が施行された。この法律によって汚物処理は地方行政に委ねられ、神戸市では尿尿を汚物に含めたが、名古屋市では尿尿はこの法律の対象外になったと言う。このような行政の対応の差異は、地域社会のどのような違いから生じたのであろうか。2つの都市以外、横浜市や長崎市などの港湾都市、あるいはコレラなどの伝染病に敏感であった横須賀市や呉市、佐世保市などの軍港都市の対応は、どうであったのか。著者の言う「都市でウンコが「汚物」になる」過程での「ウンコ処理の地域対応」は、きわめて興味深いテーマである。

尿尿処理の近代は、都市農村関係のなかで慣行化されたマイクロ処理が揺らぎ始め、大都市では機能不全へと向かい、硫酸工場などを建設しマクロ処理へと方向を転換、その模索を始めた時代であった。だが、その近代においても「下肥」は依然として使用され、1934（昭和9）年に購入肥料額が全国一の愛知県でも、下肥などの自給肥料額は肥料消費の48%を占めていた。また、第二次世界大戦後も販売肥料の不足のなか、下肥は身近な肥料として使用された。

戦後、旧軍港都市に生まれた評者が通った小学校は丘の上にあり、背後の急斜面に広がる住宅の上には猫の額ほどの段々畑が点在していた。その畑に通じる細い山道には多くの「野壺」が埋められ、それを知らない評者など多くの小学生が野壺にはまった。子供心にこれが「肥溜」かと、その臭いに辟易しつつ、敗戦後、十数年たっていたが、妙に「貧しさ」を感じたことを鮮明に覚えている。それは1960（昭和35）年以前の日本の都市周辺地域で見られた日常の光景であった。

第6章「消失するウンコの価値」では、著者は、まず、人間とウンコの関係性を反戦漫画や戦争体験記、沖縄戦下の悲惨な野戦病院を描いた小説で再認識を試みる。また、人間のウンコを餌とする伝統的な豚飼育の「フール」（豚便所）が、ア

メロカ軍政下、琉球政府の衛生政策によって姿を消したが、この時期以降、豚や養豚場、さらにウンコや便所などに対する「嫌悪感」が日本中に広がったと言う。それは日常生活における「におい」の消失につながり、今日、「消臭」「無臭」など「におい」自体を消すようになった現代社会の変化に一考を促している。

戦後は、連合国軍最高司令官総司令部 (GHQ) の衛生政策によって、下肥を使用しない「清浄野菜」の栽培を進めるなど、尿尿の衛生的、科学的な処理も始まり、1955 (昭和30) 年には厚生省が「洗浄野菜の普及について」を各県に通達した。尿尿を汲み取り、販売する時代から、ウンコの価値が消失し、汲み取り料金を払う時代へと変わりつつあった。

1964 (昭和39) 年の東京オリンピックに向けて下水道整備も進めたが、なかなか普及せず、その間、尿尿の汲み取り能力を上げたのは「バキュームカー」であり、急速に全国に広がった。その後は汚い、臭いという便所にも改善の波が押し寄せ、「水洗化」が進み、さらに「ウォシュレット」も登場した。だが、下水技術は進歩しつつも、今日、下水には様々な物質が流れ込むため、尿尿の肥料としての還元は、克服する点も多いことを指摘している。

第7章「落とし紙以前・トイレトペーパー以後」では、「人間は何でお尻を拭いてきたのか」を論じる。落とし紙以前では、葉、皮、茎、殻、木片、棒切れ、海藻、縄など驚くほど多様なものが用いられた。そのなかでよく使用されたのは、^{ふき} 蓆や葛の葉であり、地域によってはモグと呼ばれた海藻も使用された (175頁)。さらに外国の事例も紹介されているが、評者は、ウンコを「拭く」以前は「落とす」ものであったように思う。前章で述べられた沖縄の「フール」は、落とした人糞が豚の餌になったように、中国南部から東南アジアに広がる養魚池でも人糞が餌であり、大きな池にはウンコを落とすための便所小屋が林立していた。

明治時代に入ると、お尻を拭くのに紙が使用されるようになり、1897 (明治30) 年頃から大手百貨店で輸入したトイレトペーパーが販売され、1924 (大正13) 年には、土佐紙会社が初めてトイ

レットペーパーを生産したが、本格的な生産は、第二次世界大戦後であり、その後、多くの製紙メーカーが参入した。1977 (昭和52) 年には、トイレトペーパーがチリ紙生産量を抜いた。著者は、ウォシュレットの普及にもかかわらず、トイレトペーパーの生産は拡大し均一化が進むこと、すなわちトイレトペーパーの「グローバル化」により、「生きること」に関わる考え方、姿勢、技術などの背景が、世界規模で一色に塗り固められていくことに一抹の不安を感じる (191頁) と言う。

第8章「ウンコが教えてくれたこと」は、この本の結論と言える著者の主張が展開されている。ウンコへの認識の歴史的展開を追った結果、近代以降、ウンコは「汚い」もので「嫌悪」の対象となり、「排除」され、今日では「忘却」されつつあるとする。そもそも「汚い」とは何かを「土」、「手」を例にとり、「汚」への反証を行い、ウンコは「汚物」であるとの認識から解放されれば、世界は違って見えてくると述べ、その意味では「ウンコは私たちの社会を逆照射してみせる光である」 (198頁) と主張している。

また、「やや飛躍するが」と前置きを付して、「女性」にもかつて「血」に対するケガレの意識から「汚」という位置付けがあったとし、フランスの哲学者ボーヴォワールの言葉「人は女に生まれるのではない。女になるのだ」という言葉を引いて「ジェンダー」という新しい視点につながったとも説いている。

次に著者は、「文明」か「野蛮」かという二項対立を超越した画家「ゴーギャンが見たタヒチのウンコ」 (205頁) で、人とウンコのおおらかな関係を伝統儀式の中に見出す一方、近代化が進むパリ街にウンコが投げ捨てられるという劣悪な衛生事情とを対比する。近代文明を批判したゴーギャンは、1897 (明治30) 年、タヒチを画題とした代表作「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」を完成させた。本書のタイトルは、このゴーギャンの「我々」を「ウンコ」に置き換えたものであり、強烈な書名のこの本は、ゴーギャンの絵と同様、「人間の来し方、行く末を考える」1冊になる書物である。

(平岡昭利)